Vol. 78
May 20, 2026

ORGANIC GEOCHEMISTRY

Newsletter

CONTENTS

INVITATION **2**

第 43 回 有機地球化学シンポジウム ファーストサーキュラー 2

REPORT **5**

有機地球化学シンポジウム（千葉シンポジウム）報告 5

PEOPLE **9**

分析を軸に広がる地球科学 9

INFORMATION **13**

有機地球化学賞（学術賞）および 研究奨励賞（田口賞） 受賞者決定のお知らせ 13
2025 年度年会費納入のお願い 18

ANNOUNCEMENT **19**

2026 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集 19
2026 年度研究奨励賞（田口賞）選考候補者推薦の募集 20
ROG VOLUME 41 を発行 ROG VOLUME 42 へ論文を投稿しましょう！ 21

EDITOR'S NOTE **22**

INVITATION

第 43 回 有機地球化学シンポジウム ファーストサーキュラー

若葉の候，皆様にはいっそうご活躍のこととお慶び申し上げます。さて，第 43 回有機地球化学シンポジウムは，秋田大学（安藤・千代延）が世話人となり，11 月 6 日（金）～11 月 8 日（日）の日程で，秋田大学 手形キャンパスにて開催いたします。有機地球化学の出発点である「石油」を今でも産している秋田にて，51 年目のリスタートの意味を込めて，「故きを温ねて新しきを知る」をテーマとしたシンポジウムを企画いたしました。11 月の秋田はすでに肌寒いですが，石油地質学のメッカともいえる秋田地域～男鹿半島の巡検も企画しております。日本海の拡大から石油根源岩の形成，八郎潟の干拓にいたるまで有機地球化学的にも興味深い数々のスポットをご案内できればと思っています。それでは，半年ほど先のことで恐縮ですが，多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1. 日程
   11/6（金）～7（土）：講演会（口頭・ポスター）
   11/6（金）：懇親会（秋田駅前）
   11/8（日）：巡検（秋田～男鹿）
   プログラムはセカンドサーキュラーにてご案内いたします。

2. 会場
   秋田大学 手形キャンパス
   口頭発表会場：研究・イノベーション拠点 2 号館 2 階大セミナー室
   ポスター会場/企業ブース：鉱業博物館 3 階講堂（予定）

   〒010-8502
   秋田県秋田市手形学園町 1-1 秋田大学手形キャンパス
   TEL：018-889-2375（安藤）
   URL：https://www.akita-u.ac.jp/honbu/access/

   JR 秋田駅東口より徒歩 20 分。西口よりバスで 5 分，バス停より徒歩 5 分。
   秋田空港より JR 秋田駅西口まではシャトルバス(所要時間 40 分，1,200 円)あり。

3. 開催までのスケジュール
   9/4（金）　：参加・講演申込の締切
   10/2（金）　：講演要旨の締切

4. 参加費

シンポジウム受付でお支払い願います。以下の金額は予定であり，正式な金額はセカンドサーキュラーにてご案内いたします。

5. 宿泊

宿泊は各自でご予約ください。秋田駅前に多くのホテルがございます。

6. 発表形態

口頭とポスターで行います。

1) 口頭発表は 1 件あたり質疑応答，PC 交換時間も含めて 20 分を予定しています。プロジェクターを使用します。各自の PC あるいは会場用 PC でご発表いただけます。

2) ポスター発表は，A0 サイズ（縦 120cm×横 83cm）を推奨いたします。

今年度も学生参加者には「学生発表賞」(2 名)を設けて，賞状・副賞等を進呈する予定です。なお，時間と会場スペースの関係上，発表形態の変更をお願いさせていただくこともありますので，ご了承下さい。

7. 参加・講演の申込み（登録）

9/4（金）までに Google フォームにて登録をお願いします。

8. 講演要旨

口頭発表，ポスター発表ともに 1 件につき A4 版 1 ページで作成して下さい。10/2（金）までに，Google フォームにて提出をお願いいたします。要旨の様式および URL は参加申込者宛に 9/4（金）以降にお送りいたします。

9. その他

シンポジウム中の企画･会合や企業展示等を希望の方は, 世話人までご連絡下さい。

秋田シンポジウム世話人：

- 安藤 卓人
  018-889-2375／tact@gipc.akita-u.ac.jp
- 千代延 俊

写真 1: 外旭川油田で稼働中のポンピングユニット

写真 2: 秋田市道川の女川層と石油を含む凝灰岩層

写真 3: 男鹿市鵜ノ崎海岸の女川層と日本海

REPORT

有機地球化学シンポジウム（千葉シンポジウム）報告

吉岡秀佳（シンポジウム世話人代表）
坂田将、金子雅紀、朝比奈健太、髙橋幸士、風呂田郷史、宮嶋佑典

2025 年 11 月 4 日～5 日に、千葉県長生郡の宿泊施設「Sport & Do Resort リソルの森」において、2025 年度有機地球化学シンポジウムが行われました。翌 11 月 6 日には、シンポジウムに引き続き、千葉県内のチバニアン模式層や水溶性ガス田貯留層の露頭、ヨウ素工場を見学する巡検が行われました。今回のシンポジウムは、産業技術総合研究所の 7 名の会員が世話人となり、準備と運営を行いました。本年は有機地球化学会 50 周年にあたることから、有機地球化学会の小さくて濃い関係性をより濃くしたいという思いから、つくばを飛び出し、千葉県の自然豊かな森の中にある宿泊施設を会場にした泊まり込み形式のシンポジウムと、地元の巡検を企画しました。

シンポジウムには 50 人が参加し（学生は 19 人）、民間企業 2 社の協賛を得て大変盛況な会になりました（写真 1）。会場の「森のホール」は、紅葉の始まった雑木林の道を分け入ったところにあり、落ち着いた雰囲気の中で行われました。シンポジウム冒頭に山本会長からご挨拶があり、談話会設立が 1972 年、海洋研研究集会（HP で第 1 回シンポと位置付け）が 1975 年（50 年前）にあったことをご紹介されました。

プログラムは、招待講演と基調講演に続いて一般講演が行われ、その後、2025 年度の研究奨励賞（田口賞）（平川祐太会員、孫語辰会員）と有機地球化学賞（学術賞）（山中寿朗会員）の授賞式と受賞講演が行われました（同ニュースレター別記事を参照）。夕食は BBQ 形式で行われ、自分たちで具材を焼きながら、近況や研究の話を交わし、楽しい懇親会となりました。この時、坂田将会員より、初期の頃のシンポジウムの思い出について話していただきました。懇親会の後は、地元の水溶性ガス田と同一のかん水を用いた温泉で一息ついてから、宿泊場所であるコテージ内のリビングを 2 次会会場として、夜更けまでお酒を飲みながら心ゆくまで交流しました。翌日は、一般講演とポスターセッションが行われ、学生賞 2 名（大野舞子会員と宮瀬陸会員）が選ばれました（写真 2）。山本会長から賞状と副賞（地質調査総合センターの野帳と地質標本館の手拭い）が手渡されました。

3 日目の巡検では、案内人として、産総研の羽田裕貴氏と宇都宮正志氏を招いて、合計 20 人が参加しました。午前中は、チバニアン模式層（千葉セクション）を訪れ、羽田氏から、2020 年に国際地質科学連合により認定された GSSP（国際境界模式層断面とポイント）と、海水準上昇を反映する岩相、生痕化石を解説していただきました。現場では、チバニアンビジターセンターの案内人の方が同行されて、地元ならではの解説をお聞きしました（写真 3）。午後は、いすみ市文化とスポーツの森（夷隅文化会館）に

おいて、水溶性ガス田の貯留層である上総層群太田代層の露頭を前に、宇都宮氏から深海に陸源物質を運搬する重力流の堆積物の解説をしていただきました（写真 4）。その後、天然ガスの自然湧出箇所（睦沢村）と、株式会社合同資源（千葉県長生郡）のヨウ素工場のプラント施設と鉱石資料館を見学しました（写真 5）。鉱石資料館には、国内外の貴重な鉱物資源が多数展示されており、堀井正治館長から熱のこもった解説をしていただきました。その後、午後 4 時過ぎに会社の前で巡検を終了し、解散しました。

産総研の会員は、元々2020 年のシンポジウムを担当する予定でしたが、コロナ禍で延期となり、今回 2025 年度に実施することとなりました。折しも有機地球化学会シンポジウム 50 周年記念の年だったので、特別なシンポジウムにしたいと考え、世話人一同で知恵を絞り企画しました。会員対象の事前アンケートの結果を踏まえて場所を決定し、施設との調整や 2 次会、巡検等で準備することは多岐にわたり大変でしたが、世話人全員で協力して進めました。おかげさまで大過なく無事終了し、大変有意義なシンポジウムになったと考えております。施設の方や案内人、会員の皆様方には心からお礼申し上げます。

写真 1 森のホールでの集合写真

写真 2　学生賞を受賞した宮瀬陸会員（左側）と大野舞子会員（中央）

写真 3　巡検で訪れたチバニアンビジターセンター　右端が羽田裕貴氏

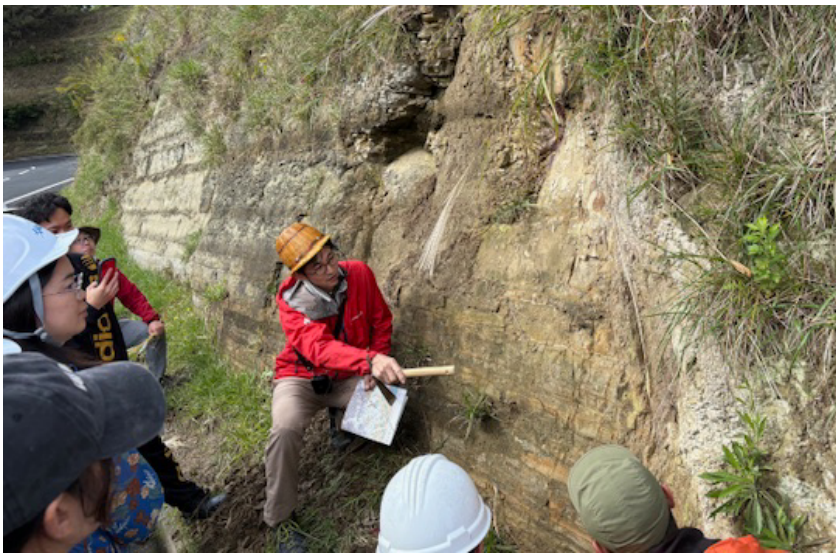


写真 4　上総層群太田代層の解説をする宇都宮正志氏

写真 5　株式会社合同資源のヨウ素工場プラント施設の見学

PEOPLE

今回は海洋研究開発機構の伊左治雄太さんにご寄稿いただきました。

分析を軸に広がる地球科学

海洋研究開発機構 物質地球科学研究部門 生物地球化学センター

伊左治雄太

海洋研究開発機構（物質地球科学研究部門、生物地球化学センター）の伊左治雄太と申します。このたびは執筆の機会をいただきありがとうございます。せっかくの機会ですので、自己紹介を兼ねて、これまでの研究生活を少し紹介させていただきます。

今となってはこの進路以外を選んだ自分を想像できませんが、地球科学の道に進むことや研究者になることを最初から考えていたわけではありませんでした。身近に研究者という存在がいなかったこともあり、当時の自分には、研究者になるという将来像を思い描く機会がほとんどありませんでした。学生時代は鉱物採集や天体観測が趣味で、いかにも地学専攻らしいところもありましたが、それを進路にしようとは考えておらず、進路選択の頃には、「潰しの利きそうな建築学科へ進学するかなあ」などと考えていました。

最終的に地球惑星環境学科を選んだわけですが、何か運命的な出会いや強い決意があったわけではなく、正直なところ、なぜ選んだのか今となってはあまりよく覚えていません。当時旅行が好きだったので、フィールドワークのある学科ならあちこちに行けそうだと思っていたような気もします。かなり安直な理由ですが、結果的にはこの選択が研究生活の入口になったので、当時の自分の直感（？）を褒めてあげたいです。

そうして選んだ進路でしたが、授業や実習を受けるうちに、地球科学が思っていた以上に幅広い学問であることを実感するようになりました。地質、海洋、大気、生物、化学などが重なり合う複合的な分野で、扱う対象もアプローチも非常に多様です。その中で私が強く惹かれていったのは、実験室で試料を分析し、環境変動や物質循環を読み解いていくプロセスでした。

最初にその面白さを強く感じたのは、卒業研究から修士研究にかけて取り組んだ、アデン湾の海底堆積物コアの研究でした。この研究では、長鎖アルカンやアルケノンの組成や濃度から、過去 20 万年間の古環境変動を復元するとともに、ホモサピエンスのアフリカからの進出との関係を議論しました。堆積物に残されたわずかな証拠から、直接見

ることのできない過去の環境や物質循環の全体像を組み立てていく作業はとても面白く、GC-MS/FID の分析結果をわくわくしながらエクセルファイルに打ち込んでいた記憶があります。

ただ、修士課程までは、そのまま就職するつもりでいました。研究を続けることを全く考えていなかったわけではありませんが、熱意を持って研究に向き合っている優秀な先輩方を見て、研究を仕事として続けていけるだけのモチベーションを自分はこの先持ち続けられるのだろうか、そもそも研究職に就くことができるのだろうか、といった不安がありました。地球環境に関わる仕事はしたかったので、関連省庁や企業の就職活動を進めていました。

しかし、これで本当に良いのだろうかという気持ちもやはりあり、父や当時の指導教員の先生方に相談したところ、返ってきたのはほとんど同じ答えでした。「いやいや、君は博士課程に進んだ方がいいでしょう」。そうして背中を押していただき、最終的には進学を決めました。自分の意思で選び取った進路というよりは、周囲に背中を押していただいて決めた進路でしたが、迷っていた時期にいろいろな人に相談しておいて本当によかったと思います。

博士課程での研究は、私にとって大きな転機であったように思います。テーマは高塩環境の物質循環で、ポルフィリン（クロロフィルの分子化石）の炭素・窒素安定同位体比を用いて、中新世後期の地中海塩分危機時の炭素・窒素循環について研究しました。また、地中海塩分危機をよりよく理解するために、現代の高塩環境の研究も始めました。その過程で、有機分子だけでなく、無機元素の動態や炭酸系の研究にも取り組むようになりました。修士課程まで扱っていたのは、すでに採取されていた海底堆積物コアでしたが、博士課程ではシチリア島へ二度行き、自分で試料を採取する機会にも恵まれました。

実はこの研究テーマには、修士課程までは比較的一人で研究を進めていた私に、周囲と協力しながら研究を進める経験を積ませようという、指導教員の先生方の意図もあったようです。実際、難しいクロロフィルやポルフィリンの分析、炭酸系や無機元素の動態という新しい研究対象、そしてシチリア島での野外調査と、周囲の方々に助けていただく場面が格段に増えました。そのように様々な背景を持つ研究者の方々と議論する中で、自分一人では見えていなかった視点に触れ、研究の幅が少しずつ広がっていきました。これは博士課程で得た大きな経験の一つだったと思います。

博士課程で特に印象に残っているのは、地中海塩分危機の最盛期に堆積した岩塩層を分析したときのことです。シチリア島から持ち帰った大量の試料からポルフィリンを何とか単離し、窒素安定同位体比を測りました。すると、現代の高塩環境の研究から予想していた仮説を強く支持する、これまで見たことのないような高い値が出ました。当時、指導教員の先生方や共同研究者と一緒にかなり盛り上がったことを鮮明に覚えています。この経験を通して、簡単な道ではないとしても、こういう瞬間を面白いと思えるの

なら自分は研究を続けていけるのかもしれない、と感じるようになりました。博士課程に進んでよかったと思えた大きな出来事の一つでした。

この経験でもう一つ強く感じたのは、指標性の高い分子に目を付け、それを実際に測れる分析法へと落とし込むことのすごさでした。有用な分子を見いだし、それを測れるようにするのは簡単ではないけれども、それができればこれまで見えなかった現象に迫ることができる。そのことを、博士課程の研究を通して強く実感しました。私が所属するグループは、有用な分子に着目し、その分析法や解析法を新たに開発することで成果を上げてきました。そうした研究を身近に見聞きするうちに、自分もいつか新しい分子の分析法を開発してみたいと思うようになりました。

そうして博士取得後に取り組み始めたのが、テトラピロール化合物の分析法開発でした。テトラピロール化合物は、クロロフィル、ヘム、フィコビリン、補酵素 F430 などを含む化合物群で、環境変動や物質循環を読み解く手がかりを与えてくれる分子です。私はグループの方々と協力しながら試行錯誤を重ね、さまざまなテトラピロール化合物の分析法を開発してきました。具体的には、生物由来鉄の指標になるヘム B、シアノバクテリアに特有のフィコビリン、そして *Prochlorococcus* に特徴的なジビニルクロロフィルなどです。

これらの分析法のいくつかは論文にしてきましたが、発表データだけを見ると開発が順調に進んだように見えるかもしれません。グループの方々からは以前から、論文に載るデータは実際に取ったデータのごく一部にすぎないと聞いていましたが、自分でやってみると、その意味を強く実感しました。特に一から開発したヘムの分析法では、取得したデータのほとんどが論文には載らないような試行錯誤のデータでした。ただ、そうした失敗がないと改善もありません。うまくいかない結果を前にしても一喜一憂しすぎず、なぜそうなったのか、次にどの条件を変えるべきかを一つずつ考えて進めていきました。理詰めで地道に詰めていくこの作業が、自分の性に合っていたように思います。

分析できる分子や元素が増えるにつれて、研究対象も広がっていきました。現代や過去の炭素・窒素・鉄循環の研究、メタン菌に関わる研究、さらには恐竜化石の分析まで、気がつけば扱うテーマはかなり多様になっています。その中で特に強くなってきたのが、生物そのものへの関心です。

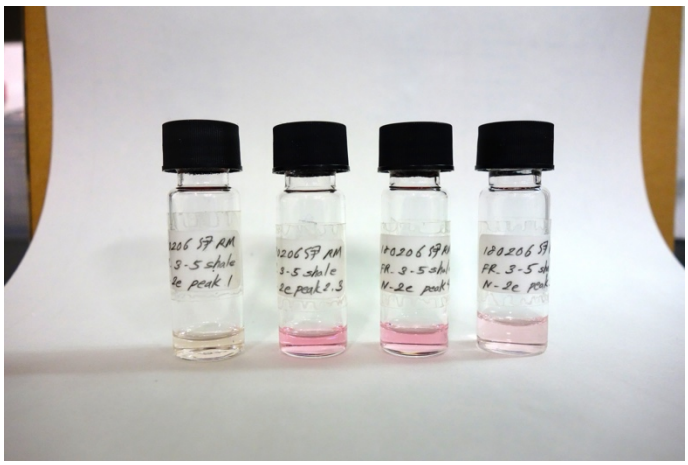
有機地球化学で使われる環境指標は非常に有用ですが、その一方で、経験則に支えられている部分も少なくありません。たとえばクロロフィル合成に伴う窒素同位体分別は、生物群によって大きく異なることが知られています。教科書的には同じ生合成経路でクロロフィルを作っているはずなのに、生物によって違いが現れる。最初は、環境指標をより正確に使うためにその違いを理解したい、という気持ちで始めた研究でした。しかし突き詰めていくと、その違いは単なる経験則で片付けられるようなズレではなく、まだ十分に理解されていない生物ごとの窒素代謝の本質的な違いを反映している可能性が見えてきました。サブテーマとして始めた研究でしたが、今では自分にとってかなり

重要なテーマになっていて、自分で植物プランクトンを培養し、同位体分析を駆使して窒素代謝の解析を進めています。

振り返ってみると、「分析」を軸にした私の研究は、日々の議論や共同研究の中で広がってきました。有機地球化学は、地質学、化学、生物学、海洋学、古生物学など、さまざまな分野と接点を持てる分野です。若い学生の方々にも、自分の専門の中だけで閉じず、少し違う分野の人と話したり、一緒に研究したりする機会を大切にしてほしいと思います。

このように研究を進めてこられたのは、学生時代の指導教員である川幡穂高先生、学部時代からご指導くださっている大河内直彦博士と小川奈々子博士、共同研究者の皆様、そして日々議論してくださる多くの方々のおかげです。この場を借りて、あらためて感謝申し上げます。これからも、分析化学を足場にしながら、地球科学の問いを広げていきたいと思います。

地中海塩分危機の最盛期に堆積した岩塩が見られる、シチリア島 Realmonte 岩塩鉱山にて。左から 2 番目が筆者。



同鉱山で採取した試料から単離したポルフィリン。これまでに報告されたポルフィリンの窒素同位体比としては最も高い値($\delta^{15}N$ = 17.2–21.7‰)を示した。

INFORMATION

有機地球化学賞（学術賞）および 研究奨励賞（田口賞）受賞者決定のお知らせ

2023 年度　学術賞

2023 年度有機地球化学賞（学術賞）について，例年どおり学会公示により選考候補者の推薦を 3 月 13 日に募集した。応募締切日 5 月 31 日までに，1 件の候補者の推薦があり，6 月 5 日～6 月 12 日の期間に，有機地球化学賞（学術賞）選考委員会によるメール会議およびオンライン会議により審査を行った。その結果，候補者は，有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいという結論に至り，奈良岡会長へ答申した。その後，7 月 10 日の理事会で承認された。

氏名：　力石　嘉人（チカライシ ヨシト）

所属・職名：　国立大学法人 北海道大学・教授

研究題目：　アミノ酸の窒素同位体比を用いた生物地球化学および生態学の研究

業績：　査読付き論文（総説を含む）130 編，国際会議での基調・招待講演 21 件

2023 年度　田口賞

2023 年度研究奨励賞（田口賞）について，例年どおり学会公示により候補者の推薦を募集した。応募締切（5 月 31 日）の時点で 3 件の推薦があった。6 月 18 日～7 月 5 日の期間に，研究奨励賞（田口賞）選考委員会によるメール会議およびオンライン会議により，審査を行った。その結果，候補者（3 名）は，研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいという結論に至り，奈良岡会長へ答申した。その後，7 月 10 日の理事会で承認された。

氏名：　木田　森丸（キダ モリマル）

学位：　博士（理学）

所属・職名：　国立大学法人神戸大学・助教

研究題目：　水圏の溶存有機物の分子組成および多様性の規定要因に関する研究

業績：　国際誌 22 編（1st 著者 13 編），国内誌 2 編（1st 著者 1 編）

氏名: 古賀　俊貴(コガ　トシキ)

学位: 博士(理学)

所属・職名: 国立研究開発法人海洋研究開発機構・日本学術振興会　特別研究員

研究題目: 地球外物質中のヒドロキシアミノ酸および核酸塩基の分布とその生成機構

業績: 国際誌　7 編(1st 著者 4 編), 国内誌　1 編(1st 著者 1 編)

氏名: 浦井　暖史(ウライ　アツシ)

学位: 博士(理学)

所属・職名: 国立大学法人信州大学・助教

研究題目: バイオマーカーおよび同位体比分析を用いた表層水圏および深部地下圏における炭素循環とその相互作用に関する研究

業績: 国際誌　5 編(1st 著者 5 編), 国内誌　1 編(1st 著者 0 編),
国内学会での招待講演　1 件

写真　伊都シンポジウムにておこなわれた授賞式
左から、山本会長、古賀会員、浦井会員、力石会員、奈良岡会員、木田会員(スクリーン)

2024 年度　学術賞

2024 年度有機地球化学賞（学術賞）について，例年どおり学会公示により選考候補者の推薦を 4 月 7 日に募集した。当初の応募締切日 5 月 31 日までに，1 件の候補者の推薦があり，その後，有機地球化学賞（学術賞）選考委員会によるオンライン会議およびメール会議により審査を行った。その結果，候補者は，有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいという結論に至り，山本会長に答申した。その後，7 月 22 日の理事会で承認された。

氏名：　高野　淑識（タカノ　ヨシノリ）

所属・職名：　国立研究開発法人 海洋研究開発機構・上席研究員

研究題目：　太陽系始原物質の有機分子と化学進化に関する研究

業績：　査読付き国際誌　144 編
有機地球化学分野で世界的な研究拠点の基盤整備と運営
Progress in Earth & Planetary Science，Geochemical Journal の編集委員
有機地球化学分野のみならず，科学教育に積極的に貢献

2024 年度　田口賞

2024 年度の研究奨励賞（田口賞）について，例年どおり学会公示により候補者の推薦を募集したが，締切当日（5 月 31 日）の時点で推薦はなかった。当該年度における受賞者は無し。

写真　松江シンポジウムでおこなわれた授賞式
左が高野会員、右が奥井会員

2025 年度　学術賞

2025 年度有機地球化学賞（学術賞）について，例年どおり学会公示により選考候補者の推薦を 4 月 23 日に募集した。当初の応募締切日 5 月 30 日までに，1 件の候補者の推薦があり，その後，有機地球化学賞（学術賞）選考委員会によるオンライン会議およびメール会議により審査を行った。その結果，候補者は，有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいという結論に至り，山本会長に答申した。その後，7 月 18 日の理事会で，理事からの意見を踏まえ，会長が受賞者を決定した。

氏名：　山中　寿朗（ヤマナカ　トシロウ）

所属・職名：　国立大学法人　東京海洋大学・教授

研究題目：　熱水系を含む地圏−水圏−生物圏間における窒素の挙動に関する有機および同位体地球化学的研究

業績：　査読付き国際誌　118 編，国内誌　16 編，査読付き特集出版　4 編，著書（分担執筆）3 編，その他報告書等　30 編

2025 年度　田口賞

2025 年度の研究奨励賞（田口賞）について、学会公示により候補者の推薦を募集した。応募締切り時点（5 月 30 日）で 2 件の推薦があった。選考委員会で応募書類を確認後，オンライン会議により審査を行った。その結果、候補者（2 名）は受賞者選考規則を満たしており，研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいという結論に至ったため，会長に答申した。その後，7 月 18 日の理事会で，理事からの意見を踏まえ，会長が受賞者を決定した。

氏名：　孫　語辰（ソン　ユーシン）

学位：　博士（理学）

所属・職名：　カリフォルニア大学サンタクルズ校・ポストドクトラル研究員

研究題目：　自然界におけるアミノ酸分子レベル炭素・窒素同位体比を用いた多次元解析法の最適化と海洋生物地球化学への応用に関する研究

業績：　国際誌　5 編（1st 著者 4 編）

氏名：　　平川　祐太（ヒラカワ　ユウタ）

学位：　　博士（理学）

所属・職名：　　海洋研究開発機構・ポストドクトラル研究員（学振 PD）

研究題目：　　初期地球における核酸構成分子および有機リン分子の物質進化に関する有機宇宙化学的研究

業績：　　国際誌　5 編（1st 著者 4 編）

写真　千葉シンポジウムでおこなわれた授賞式
左から、山中会員、山本会長、平川会員、孫会員（スクリーン）

2025 年度年会費納入のお願い

会員・会費担当　山本

平素より当学会の活動・運営にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

本会の会計年度は 7 月 1 日から翌年 6 月 30 日までとなっており、会員の皆様には当該期間内に年会費（正会員：年額 3,000 円、学生会員：年額 1,000 円）のお支払いをお願いしております。すでに多くの皆様にご納付いただいておりますが、まだお手続きがお済みでない場合は、お早めにお支払いいただきますようお願い申し上げます。

なお、過年度分に未納がある方には、別途メールにてご案内いたしますので、あわせてご対応をお願いいたします。

【振込先】
郵便振替口座 00110-7-76406
（名義人：一般社団法人　日本有機地球化学会）

＜他行から振り込む場合＞
ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900）
店名：〇一九店（ゼロイチキュウ店）
預金種目：当座
口座番号：76406　（7 桁の番号が必要な場合は頭に 00 を付けてください。）
名義人：一般社団法人　日本有機地球化学会

なお、クレジットカード払いをご希望の場合は、請求書を発行いたしますので、事務局（office_admin@ogeochem.jp）までお申し出ください。

（クレジットカード払いの場合、年会費は手数料を含め、正会員¥3,154、学生会員¥1,079 となります。）

ご不明な点がございましたら、事務局（office_admin@ogeochem.jp）までお問い合わせください。

何卒よろしくお願い申し上げます。

ANNOUNCEMENT

2026 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集

有機地球化学賞（学術賞）2026 年度受賞候補者選考委員会

委員長 吉岡　秀佳

有機地球化学賞（学術賞）受賞者選考規則により、2026 年度同賞選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記を参照のうえ、受賞候補者をご推薦ください。

記

候補者の資格： 有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法： 本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法： 下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記述し、PDF ファイルとして E-mail に添付して送付してください。

1）候補者の履歴（大学卒業以降の学歴、職歴、その他）
2）推薦の対象となる研究題目および推薦理由
3）研究業績目録
4）推薦の対象となる主要な論文 10 編
5）推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2026 年 5 月 29 日（金）

提出および問い合わせ先：

〒305-8567 つくば市東１－１－１ 中央事業所 7 群
国立研究開発法人産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門　吉岡秀佳 宛
電話 050-3521-0147
E-mail：hi-yoshioka@aist.go.jp

これまでの受賞者と研究題目については http://www.ogeochem.jp/archives.html（日本有機地球化学会ＨＰ「学会アーカイブス」）をご覧ください。

2026 年度研究奨励賞（田口賞）選考候補者推薦の募集

研究奨励賞（田口賞）2026 年度受賞候補選考委員会

委員長 金子雅紀

研究奨励賞（田口賞）受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては下記をご参照のうえ、受賞候補者をご推薦ください。
会員の皆様におかれましては、是非とも候補者ご推薦のほどお願い致します。

記

候補者の資格： 生年月日が 1991 年 4 月 2 日以降であり、有機地球化学、石油地質学、堆積学の 3 分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法： 本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法： A4 サイズの用紙に下記事項を任意の形式で記述し、
PDF ファイルとして E-mail に添付してお送り下さい。

1) 推薦理由及び研究題目
2) 研究業績目録
3) 研究論文の別刷りまたはコピー
4) 履歴書
5) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2026 年 5 月 29 日（金）

提出及び問い合わせ先：
〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1　つくば中央事業所 7 群
国立研究開発法人産業技術総合研究所　地圏資源環境研究部門　金子雅紀 宛
電話：080-2289-3815
E-mail: m-kaneko@aist.go.jp

これまでの受賞者と研究題目については http://www.ogeochem.jp/archives.html（日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

ROG VOLUME 41 を発行
ROG VOLUME 42 へ論文を投稿しましょう！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG（Researches in Organic Geochemistry）は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、完全電子化ジャーナルとして J-STAGE に論文を公開しております。昨年巻である ROG 41 巻（Volume 41）2 号（Issue 2）は、2025 年 12 月に発行され、論文 1、技術論文 1 報（すべて英文論文）の計 2 報が掲載されました。表紙デザインは掲載された北海道大学低温科学研究所 李谨岑（Jincen Li）博士の英文論文の中にある図をもとに作成されました。

2026 年巻である ROG 42 巻（Vol. 42）は、1 号（Issue 1）は 2026 年 7 月頃、2 号（Issue 2）は 2026 年 12 月頃に発行し、その約 1 か月後に J-STAGE にて web 公開する予定で進めております。皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1）論文（article）、2）短報（short article）、3）技術論文（technical paper）、4）総説（review）、5）議論（discussion）になります。また、J-STAGE における J-STAGE Data（論文の補足資料や研究成果の根拠となるデータ、研究過程で得られた情報などを web 公開するデータリポジトリシステム）を有効に活用して、皆様の研究成果における大容量データの公開や、ROG の図表を Supplementary data 化して本文を簡素化するなどの改良を行っております。ぜひ、J-STAGE Data をご活用ください。学会で発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会ホームページの投稿規定（2022 年 10 月改定）<http://www.ogeochem.jp/pdf/ROG_kitei_221018.pdf>をご参照ください。また、上記の枠に当てはまらない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域の**ボトムアップ**をより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿：sawadak@sci.hokudai.ac.jp
郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
北海道大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門
沢田 健 編集委員長宛（TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394）

EDITOR'S NOTE

編集委員になりました滝沢です。2 年ぶりにニュースレターを発行することができて、一安心しています。ニュースレターを通して、有機地球化学会の活動を知っていただけたら嬉しいです。若手（自称）編集委員でこれから頑張っていきたいです！（滝沢）

本号より編集委員を務めさせていただくことになりました、海洋研究開発機構の古賀です。ニュースレターの編集を通じて、多くの皆様のご協力によって本誌が支えられていることを実感しております。特に、本号の伊左治様の PEOPLE の記事のように、研究者としての歩みや価値観に触れられる内容は、多くの若手研究者にとって大きな刺激になると感じています。有機地球化学会の魅力をより広く発信できるよう尽力してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（古賀）

有機地球化学会には 2012 年から参加していますが、今回初めて学会の仕事を担当させて頂きます。2018 年に PEOPLE の執筆依頼を受けて好きなことを書きましたが、その年の年会で多くの方から声をかけて頂いた記憶があります。微力ですが、学会の発展に貢献できるように頑張ります！（浦井）

表紙 写真： 木崎湖（長野研）での調査風景

Organic Geochemistry 第 78 号 （2026 年 5 月 20 日 発行）
発行人
日本有機地球化学会会長 山本正伸
〒060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 5 丁目
北海道大学 大学院地球環境科学研究院 A204 室
電話：011-706-2379

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北 19 条西 8 丁目
北海道大学 低温科学研究所
事務局長 力石 嘉人
電話：011-706-5472（直通）
E-mail : office@ogeochem.jp

編 集
滝沢侑子（北海道大学）
浦井暖史（信州大学）
古賀俊貴（海洋研究開発機構）